



新納忠元物語 五

伊佐市立菱刈郷土資料館 指導員 原田純一

島津軍の菱刈侵攻 後編

(大口城陥落)

永禄十二年(1569年)

一月の和睦成立後の三月にも菱刈・相良連合軍(菱刈軍と略す)は、堂崎付近で島津軍の十七名を切り殺し、更に、羽月城も攻めた。この事件後、羽月以北の城を守っていた島津義虎は、本拠地の出水に引き揚げてしまった。このため義久は、羽月城の最前線基地には新納忠元・肝付兼寛を移し、市山城には戦い上手な貴久四男の家久を入れた。

菱刈軍は、大口城に籠城して一年半以上が過ぎ、食料に困っていることを、家久・忠元等は知っていた。そこで、市山城から堂崎・鳥巢を経由

して鳥神岡麓の平出水川沿いの峡谷を抜けて平出水城に兵糧を運ぶ作戦をたてた。これは島津軍が得意とする『釣り野伏せの戦法』で同年五月六日決行した。まず、家久の兵五百人が、兵糧にみせかけた荷駄を、牛馬に積み市山城を出発、これを大口城から偵察していた菱刈軍は、およそ千人の兵で、「それっ! あゝ兵糧を奪い取れ!」と出撃して来た。島津軍は、鉄砲で応戦しながら鳥神岡麓の峡谷の方向へと逃げ、時に、踏み止まって応戦した。菱刈軍は、兵糧を奪わんとして更に追撃して来た。その時である、左右の山腹に潜んでいた島津軍の八百人余りの伏兵が飛び出す合図の法螺貝が、高らかに鳴

り響いた。ほぼ同時に前からも飛び出し襲い掛かってきた。菱刈の軍勢は、大混乱となり総崩れとなった。島津軍は、三百を超える首を挙げる大勝利となった。この戦いは、

音寺潮五郎が『おどんな日本一』という小説に書いている。

この戦いの後、同年九月に、菱刈軍は島津軍と和睦して、菱刈両院(現在の伊佐市全地域)を島津氏が治めた。ここに建久五年(1194年) 初代菱刈重妙が太良院(伊佐市菱刈南浦)に下向して以来375年間(1194~1569年)にわたって菱刈両院に勢力を誇った菱刈氏は島津氏の軍門に下ったのである。しかし、天正二年(1574年) 島津氏に對して異心を抱いた角により、菱刈南浦の本城をも奪われ、菱刈氏は伊集院神殿に移され、かくして、菱刈氏はまったく父祖の地から離されてしまったのである。

☆次回は『忠元 大口地頭となる』

(参考資料)

- ・旧記雑録後編一 167~230ページ
- ・旧記雑録拾遺 忠元勲功記
- ・大口郷土誌 上巻
- ・菱刈町郷土誌 改定版